

松本達郎*・大塚裕之**・大木公彦**：鹿児島県下の四万十帯から産した白亜紀化石

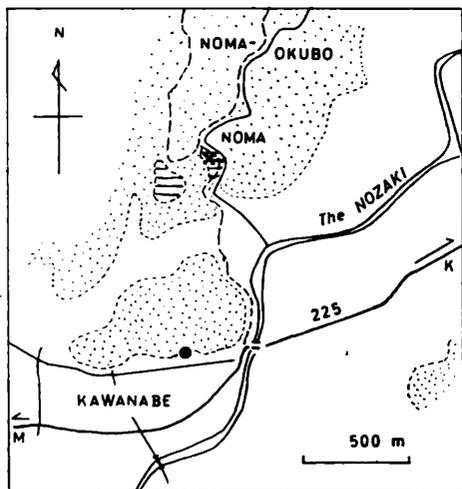
Tatsuro MATSUMOTO, Hiroyuki OTSUKA and Kimihiko ÔKI : Cretaceous
Fossils from the Shimanto Belt of Kagoshima Prefecture

(1973年5月16日 受理)

さきに奄美大島の四万十帯相当部から、白亜紀菊石の産出が報告された (MATSUMOTO *et al.*, 1966)。しかし九州本島の四万十帯からは、菊石はまだ見つかっていなかった。このたび、鹿児島川辺郡川辺町野間 (第1図参照) の採石所で採集したとあって、菊石破片のついた石を、川辺小学校生徒牧角猛君が鹿児島大学に持参した。これを端緒としてこの地点をさらに探求し、保存状態はよくないが、かなりの数の化石を集めることができた。採石所は川辺町役場の北方約1km、神殿川が滝をなしている地点、川の右岸の道路の南西側にあり、道路に敷くバラスを採っている。露出している岩石は、厚さにして約50mの暗色泥岩であるが、いくらかホルンフェルス化している。

採集した化石は保存が不完全で、正確には同定しにくい。 (1) *Scalarites* sp. A, (2) *S.* sp. B, (3) *Polyptychoceras* cf. *obstrictum* (JIMBO), (4) *P.* (*Subptychoceras*) cf. *yubarensis* (YABE) などの異常巻きの菊石が多く、 (5) *Muniericeras* (?) sp. (正常巻き), (6) *Acila* sp. (以上6種の代表例が第2図1—6), (7) *Inoceramus* cf. *yubarensis* NAGAO and MATSUMOTO, (8) *I.* cf. *mihoensis* MATSUMOTO, (9) ウニなどもある。 (1) は北海道産の未記載種 (巻き方は *Scalarites* と *Polyptychoceras* の中間的で、肋が密集し、*P. obstrictum* に近縁) に比較し得る。上記の諸種の組み合わせは、上部白亜紀下部セノニアン (とくに北海道でいうと K5α の上部) を強く暗示するし、少くも上部白亜紀ということは誤ないであろう。

鹿児島県下の四万十帯の地層は、北薩地域では橋本 (1961) により層序が区分されているが、その他ではシラスの被覆のため、地層の追跡が困難であり、層序も明確にはわかっていない。上記の化石を産した泥岩が、全体の層序のどこに位置するかは、今後明らかにしていかなければならない。この採石所では走向 N50°—70° E、北西に30—50° 傾斜する。このすぐ南、すなわち下位には、砂岩勝ちで薄い頁岩を挟在する地層が、E—W の走向、北に60°の傾斜で露出している。これは一部は級化成層を示す。しかし採石所の泥岩には砂岩を挟在せず、泥岩中に不明確な葉理が時に認められるだけである。この2つの露出のまわりは“シラス”でかこまれ、中生界は孤立しており、20万分の1鹿児島県地質図 (鹿児島地質研究会, 1961) ではこの化石産地は“シラス”の中にある。このように思いがけない地点に、しかもいくらかホルンフェルス化した岩石の中から菊石その他の化石が見出され、時代のおよその見当もつくということは、暗夜に光明を見出した感があり、今後の調査により、さらに層序・時代・構造を明らかにできるというのぞみが出てきた。ここにとりあえず化石の産出を報じて、今後の発展に役立てたい。

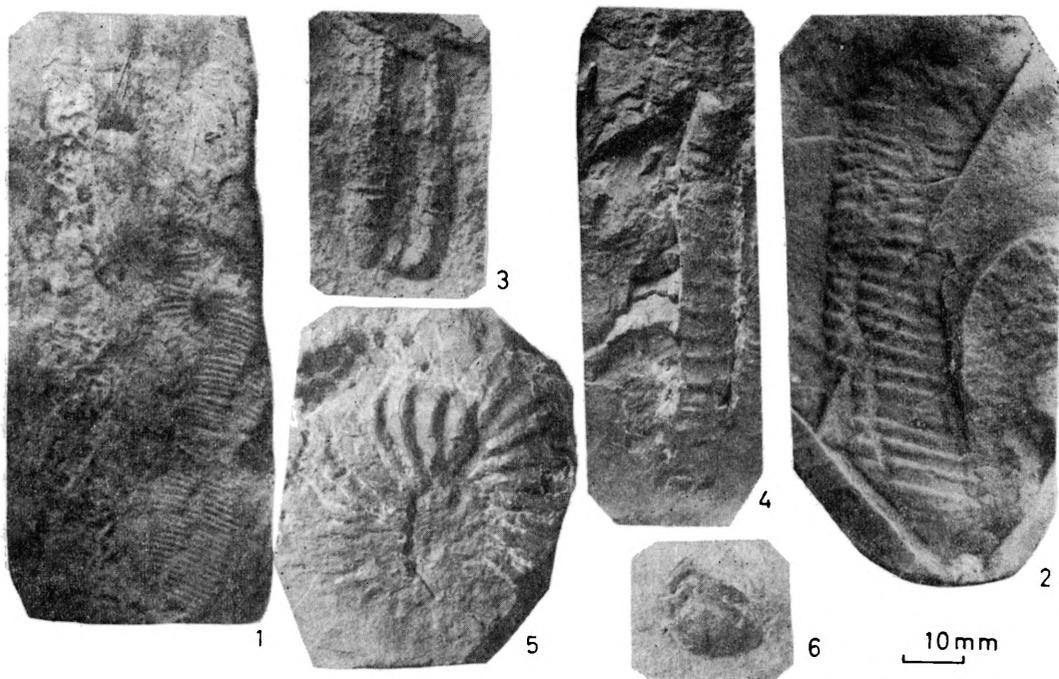


第1図 化石産地付近地質略図

×：化石産地 ●：川辺町役場 K：至鹿児島
M：至枕崎 225：国道225号線 細点部：灰石
水平平行線：中生界 (なお国土地理院発行2万
5千分の1地形図「知覧」を参照されたい。)

* 九州大学理学部地質学教室

** 鹿児島大学理学部地質学教室



第2図 化石標本の写真

1～6は本文に記した(1)～(6)の各種の代表例。1～3は雌型の実物から雄型の模型を作り撮影。原標本は鹿児島大学理学部地学教室に保管。

ここでもう一つ言及したいことは、すでに述べたように(MATSUMOTO *et al.* 1969), 従来報告された四万十帯の菊石類の産出は散点的だが, その多くが装飾の強いもので, 海外の実例では浅海相によく産するのと同じ部類であることが注意される。今回も *Muniericeras* に外観の類似した装飾のかなり強いものが見出されたことと, *Diplomoceratidae* に属する, 活発な遊泳はしなかったであろうと思われる異常巻菊石が, 偶発的に混入したのではなく, かなりの数出たことは興味深い。四万十帯の諸層の堆積環境を考察する上に, 無視できない事実である。さらに付言したいのは, 数年前関東山地の四万十帯たる小仏層から産したという標本(模型)を橋本 亘・菅野三郎両氏の好意で松本は見たことがあり, これもまた異常巻菊石 *Polyptychoceras* に類似したものであった。その産地が確かめられないので真偽の程に疑問がもたれ, 報告されずに過ぎた。しかし今回のものから考察すると, やはり可能性が強くなってきたので, 小仏層をも

さらに探求するべきである。

終りに, 最初の発見をした牧角 猛君の注意深い観察力に敬意を表し, また尊父牧角 隆先生と鹿児島大学早坂祥三教授の御厚意に深く感謝する。

文 献

- 橋本 勇(1961), 鹿児島県北薩地方の時代未詳層群の層序と構造。九大教養部地学研究報告, no. 8, p. 47—62, pl. 3—4.
 鹿児島地質調査研究会(1961), 鹿児島県地質図(20万分の1)および説明書, 鹿児島県。
 MATSUMOTO, T. and HIRATA, M. (1969), A new ammonite from the Shimantogawa group of Shikoku. *Trans. Proc. Palaeont. Soc. Japan*, N. S., no. 76, p. 177—184, pl. 20.
 ———, ISHIKAWA, H. and YAMAKUCHI, S. (1966), A Mesozoic ammonite from Amami-Oshima. *Ibid.*, no. 62, p. 234—241.